

パリサイ主義の糾弾（メシア拒否をした指導者たちへの裁きのことばとやもめの献金）**文脈の確認**

1. イエスの公生涯、最後の1週間。
2. イエスは「過越の小羊」として、十字架に付こうとしている。
 - 1) 「過越の小羊」はイエスの型、イエスは本体である。
 - 2) ニサンの月10日から14日まで、小羊はしみや傷がないかどうか、吟味を受ける。
 - 3) 4つのグループの指導者たちが、イエスに挑戦した。
3. 第一のグループは、祭司長とパリサイ人たち
 - 1) 論点はイエスの権威について
 - 2) イエスは、「バプテスマのヨハネの権威はどこから来たか」と質問で返す。
 - 3) 彼らは「わかりません」と答える。
 - ① バプテスマのヨハネによる証言と、イエスによる多くのしるしによって、イエスのメシア性は証明されているのに、それを認めない
 - ② この頑なさが、彼らの問題点
 - 4) イエスは、彼らの問題点がわかるように、3つのたとえ話を語った。
 - ① 父親とふたりの息子のたとえ話
 - ② ぶどう園の主人と農夫のたとえ話
 - ③ 婚宴のたとえ話
4. 第二のグループは、パリサイ人の弟子たちとヘロデ党の者たち（素性を隠して）
 - 1) 論点は、ローマ皇帝カイザルに税金を納めてよいのか
 - 2) イエスは、「ローマに納めるデナリ銀貨の肖像は誰か」と質問で返す。
 - 3) 彼らは「カイザルのです」と答える。
 - 4) イエスは、「カイザルのものはカイザルに返せ。神のものは神に返せ」と教える。
 - ① 神によって立てられた地上の権威によって、人は社会的な恩恵を受けており、人は地上の権威に服するべきである。
 - ② 同時に、人は神の支配のもとにあり、神を敬うべきである。
5. 第三のグループは、サドカイ人たち
 - 1) 論点は、復活について
 - ① 「復活なし」、「人は死んだらその霊魂もなくなる」と主張するサドカイ人たちが、不可解な設問を提示する。
 - ② モーセの律法に従って合法的に複数の男と結婚した女は、復活のとき誰の妻になるのか？
 - 2) イエスは、そんなおかしい質問をするのは、聖書も神の力も知らないからだ、彼らの本質を突く。
 - 3) そして、出エジプト記を引用して、「モーセに告げられた神の名は『アブラハム、イサク、ヤコブの神』とある箇所を読んだことがないのか」と言って、モーセ五書の中に復活を前提にした箇所があることを示す。

- ① 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。アブラハムも、イサクも、ヤコブも、彼らの霊魂は今、神の前に生きている。
 - ② 「アブラハム、イサク、ヤコブの神」という御名は、「アブラハムと契約を結び、その契約をイサク、そしてヤコブに継承させた神」という意味であり、契約の神の聖なるお名前である。それ自体が固有名詞であって、単に「アブラハム、イサク、ヤコブが信じた神」という意味ではない。アブラハム契約の契約条項のひとつ「この地を与える」という約束は、彼らが復活し、彼らがその足で約束の地に立つことで成就する。ということは、この契約は、復活があることを前提にしている。
6. 第4は「ひとりの律法学者の質問」。そして、イエスからパリサイ人たちへの質問「メシアの神性」について
- 1) メシアは、単にダビデの血筋から生まれるだけでなく、神ご自身が人となられた方であると、聖書が預言している。よって、イエスが神を父と呼び、ご自身を神と等しくしたことは、メシアであれば、当然である。神を冒涇したことにはならない。
 - 2) イエスには、何の傷も問題も認められない。挑戦者たちは、もはや何の質問もできず、黙ってしまう。
 - 3) これで、イエスに向けられた「小羊の吟味」は終わる。
7. きょうの箇所は、小羊の吟味にすぐ続いて起きた出来事。
- 1) イエスの公生涯最後の公の教えで、イエスをメシアではないと拒否したユダヤ人指導者たち（律法学者とパリサイ人たち）を糾弾する。これは、王なるメシアによる裁きのことばであり、ゼカリヤ 11 : 8 の預言の成就である。
 - ① 群衆と弟子たちに向かって（マタイ 23 : 1～12、マルコ 12 : 40、ルカ 20 : 47）
 - ② パリサイ人たちに向かって（マタイ 23 : 13、15～36）
 - ③ エルサレム崩壊の預言（マタイ 23 : 37～38）
 - ④ 再臨の預言（マタイ 23 : 39）
 - 2) そして、やもめの献金について弟子たちに教える（マルコ 12 : 41～44）。

群衆と弟子たちに向かって（マタイ 23 : 1～12、マルコ 12 : 40、ルカ 20 : 47）

- 1. パリサイ人たちの教えの本質は、偽善（1～3 節）
- 2. パリサイ人たちは口伝律法を作り、民衆に重荷を与える（4 節）
- 3. パリサイ人たちは、利己主義と自己義認に満ちている（5 節）
- 4. パリサイ人たちは、自分を高く見せることを好む（6～12 節）
- 5. パリサイ人たちは、長い祈りによって食欲を隠す（14 節、ルカ 20 : 47）

パリサイ人たちに向かって (マタイ 23 : 13、15～36) 7つの「わざわざいだ。」

1. メシアの拒否 (13 節)
2. 的外れの熱心さ (15 節)
3. 優先順位の逆転 (16～22 節)
4. 実質のない儀式主義 (23～24 節)
5. 外面へのこだわり I (25～26 節)
6. 外面へのこだわり II (27～28 節)
7. メシアの拒否 (29～36 節)

エルサレム崩壊の預言と再臨の預言 (マタイ 23 : 37～39)

1. エルサレム崩壊の預言 (37～38 節)
2. 再臨の預言とその条件 (39 節)

やもめの献金 (マルコ 12 : 41～44)

1. イエスの観察 (41～42 節)
 - (1) 献金箱
 - ① 婦人の庭の一方の壁に、献金箱が置かれていた。婦人の庭に置かれていた理由は、男女の区別なく献金ができるようにするため。
 - ② 献金箱は、13 個あった。それぞれ、目的が異なる献金箱であった。
 - ③ 入れる口は、ラッパの形をしていた。
 - (2) レプタ銅貨 2 枚
 - ① レプタ銅貨は、ユダヤで流通していた銅貨。硬貨の最小単位。
 - ② 他方、ローマの銅貨は、アサリオンとコドラントの 2 種類。1 アサリオンは 4 コドラント。二羽の雀は 1 アサリオン (マタイ 10 : 29)
 - ③ 1 コドラントは 2 レプタ (マルコ 12 : 42)
 - ④ ローマの銀貨はデナリ、1 デナリは労働者の 1 日の賃金。1 デナリは 16 アサリオン。
 - ⑤ よって、1 デナリは 64 コドラント、128 レプタ。
 - ⑥ 労働者 1 日の賃金を仮に 6400 円とすると、1 レプタは 50 円。レプタ銅貨 2 枚は、「50 円玉 2 枚」に相当する。
 - (3) ひとりの「貧しい」やもめ→ギ「プトーコース」施しに頼るほどの貧しさ、乞食
 - ルカ 21 : 2 ギ「ペンティカロス」飢えているほどの貧しさ
2. イエスの教え (43～44 節)
 - (1) 弟子たちを呼び寄せた (パリサイ人たちへの激しい糾弾とエルサレム崩壊の預言などで、弟子たちが恐れを感じてイエスと距離を置いている雰囲気がある)
 - (2) 人間による評価では、どれくらいの額を投げ入れたか
 - (3) イエスによる評価では、どれくらいの犠牲を払ったか
 - (4) このやもめは、生活費の全部を投げ入れた。

今日の適用

1. やもめの献金からの教訓
 - (1) パリサイ人たちとやもめの信仰の対比
 - ① イエスは、神殿の中で、初めて小さな光を見た。
 - ② このやもめは、レムナント（貧しい者）の典型である。
 - (2) ここには、全的献身の姿がある。
 - ① 彼女は、1 レプタだけ捧げる道もあったが、全部を捧げた。
 - ② 全的献身の前に、頼ることのできるお方は神のみという信仰がある。
2. 全的献身は人の力ではできない。新約の聖徒の献身的前提は、神を喜ぶこと。献金が「喜んで、進んで、自分の心の中で決めて」（Ⅱコリ 8 : 1~15、9 : 5~7）の原則であるのと同じ。神を喜ぶ段階への道筋を、弟子たちの歩みとローマ人への手紙から見ましよう。
 - (1) 弟子たちがイエスを否むことの予告
 - ① 過越の食事の席で。弟子たちの間でだれが一番偉いだろうかという論議が起こったときに。ペテロに対して。ペテロの回答（ルカ 22 : 31~34）
 - ② 過越の食事の席で。ペテロからの質問「主よ。どこにおいでになるのですか。」に伴って。（ヨハネ 13 : 36~38）
 - ③ 賛美の歌を歌ってから、オリーブ山に行ってから。弟子たちに対して。ペテロの回答と弟子たちみなへの回答（マタイ 26 : 31~35、マルコ 14 : 26~31）
 - (2) 復活後、ガリラヤで会うことの予告（マタイ 26 : 32、28 : 7）
 - (3) 和解の食事（ヨハネ 21 : 1~19）
 - (4) ガリラヤの山での礼拝（マタイ 28 : 16~20、Ⅰコリ 15 : 6）
 - ある者は疑った（マタイ 28 : 17）
 - (5) 聖霊の中にバプテスマされる（使徒 1 : 5、2 : 4、33）
 - (6) 和解から神を喜ぶ段階への道筋（ロマ 5 : 1~11）
 - ① 御子の死によって神と和解させられた（10 節、Ⅱコリ 5 : 19）
 - ② その和解を受け入れた（Ⅱコリ 5 : 20~21）＝信仰によって義と認められた（1、9 節）
 - ③ 主イエスキリストによって神との平和を持っている（1 節）
 - ④ 私たちのために和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいる（11 節）